

意見交換会

はじめに

石井：今年で4回目になる木製サッシフォーラムの本来の目的は、木製サッシの普及ということなのですが、それに限らず木材の良さを知っていただくというのがあります。

今日は、増田先生に木の良さということで講演いただいたわけですが、木の良さというと、感性的なものもありますし、強度的なものもありますし、安全性のようなものもあります。木製サッシと直接関係あるというものではないのですが、内装材に関してはそういうことは非常に関係してきます。内装材が絡んでくると、当然木製サッシも絡んでくるといって、風が吹けば桶屋が儲かる的なところがあるんですが、大変おもしろいお話でした。

それから、福島科長には窓の役割のようなものについて、断熱でありますとか眺望でありますとか、それから特に換気についてお話しいただきました。最近、特に室内空気質、空気汚染の関係が話題になっています。VOCとかホルマリンといった名前を聞かれたことはあるかと思います。住宅メーカーなどからよく話に出ています健康住宅は、大体が室内空気が綺麗ですよ、というのが売りになっているのではないかと思います。それに関しては、換気が非常に有効であるというのは色々なところから言われていることです。

福島科長の話では熱をどう逃がすかがメインだったと思いますけど、それ以外にもそういう室内空気を綺麗にするという役割もあります。そのためには、北海道に多い機械に頼った換気ではなく、自然の力で換気をするというのは大切だと思うわけです。そういうのを窓に担わせる非常に大きな役割として考えて良いのではないかと思います。

それから、朝倉研究員には、窓の紹介、特にヨーロッパの窓の紹介をしてもらいました。また、それに対してみなさんがどう感じるかについてアンケート形式の調査をしたんですが、せつかく50人以上の人に協力し



意見交換会の様子



ロビーでの展示

てもらったので、窓の関係、建築の関係の方にお知らせしないのもったいないと思い、今回あえてその結果を出させていただきました。福島科長もちょっと言われてましたけど、窓は大きければいいものではない。実質的にはそういうことであろうとは思いますが、みなさんが好みとして考えられるのは、窓が大きい、眺望がいい、といっても外からの眺望ではなく中から外が綺麗にクリアに見える窓を要求している傾向がみられます。これは好き嫌いの問題ですから、なかなか

「これがいいんですよ」、とは言いにくいものがありますが、それについて問題があったら改善するといった方向に行かなくてはいいじゃないかなという気がしております。

換気用の窓の雨仕舞いは？

質問：福島科長は、自宅の換気用に一番高いところの北向きに突きだし窓を設けて、換気をやっていると言われていましたが、雨仕舞いの方はどのように設計されているのでしょうか？

福島：雨仕舞いは、あまり考えていません。雨仕舞いというのはそこに吹き込んできても大量に吹き込まなければいいとして、そこは汚れてもいいというようになっています。確かに濡れます。でも、室内までには入ってきません。外側には何もしていません。ただの突きだし窓です。最初は嵐の時に相当入ってくるかなと心配していて、嵐の時は閉めていたのですが、今年は6月から11月までずっと開けっ放しでした。その間には、もちろん嵐があったりしたのですが、全く気にもとめなくて、普段11月から暖房するんですけど、10月にどうも寒いから暖房をしようとして、窓が開いていることに気がついたくらいです。小さな窓なんですけど、そうやって開けておくと、やっぱり空気が綺麗ですね。窓を開けておくので、雨仕舞いの点では完全に外から水が入らないというのはちょっと難しいです。それより、むしろわずかに入ってきたのは大丈夫だ、という内側の処理の方が簡単なのではないかと、思います。

ドレーキップについて

石井：私も自宅の話をしていただきますと、私の家ではドレーキップという内開き、内倒し窓をほとんど使っています。福島科長のお宅ではないのですが、夏になると2階に小さな窓が二つ連窓になっているのがあり、そこは開けばなしという状態です。で、結構風が抜けていくということなので、開けっ放しにできる窓があるというのは、やはりいいかなと思います。突きだし窓もいいのですが、私の個人的な意見を言わせていただければ、ドレーキップの窓というのは、開けっ放しによる換気を考えるという意味で言えば、大変有効な窓でないかという気がしています。

福島：私どもでも、ドレーキップの窓を是非どこかにつけましょう、特に入り口になるところはドレーキップの方が風が入りやすいですから、是非つけましょうという話をしているのです。が、先ほどお話ししたように日本の窓は、外についている半外付け窓なので内側にかなり枠がついています。最近あるところでドレーキップの窓を単独でつけたところ、ちゃんと開かないということがあり、もう少し考えなくてはいいかなと思ったのですけれども。石井さんの所はいかがでしょうか。開けてるのに風が入ってこないということはありませんか。

石井：それは特にないです。どこまで期待されているかという語なんですね。完全開口にして思い切り気持ちのいい風が吹き込んでくるのを期待されているのであれば、ドレーキップでは不足だと思います。換気に限定して考えるのであれば非常に有効であると考えられますから、考え方を変えた方がいいという気がします。

金具の輸入をされているグレッチ・ウニクス株の高橋さんは、この辺に関して詳しいと思いますが、何かありませんか。

高橋：私どもはドイツで金物を100年ほど作ってきたメーカーの日本の会社です。ドイツは、石を投げればドレーキップにあたるという感じです。しかも、40%が木製で、30%ぐらいが樹脂の窓かもしれません。

ドイツの場合は、ドレーキップと呼ばれる、内倒しで上の方を開けたまま買い物や休暇に行っても家の中が知らないうちに換気している、というような感じのものが使われています。今のドレーキップは完成されていますが、はるか昔に私が見たドレーキップは、今のようにハンドルだけで操作できなくて、色々なところに蝶番がついていて、人力で位置を変えて内倒しさせていたなんてのがありました。

北欧で普及している回転窓や突き出し窓にもちょっと開いて止められるような装置がありますから、あれもある意味で防犯と換気を考えています。金物というのは、その国の人たちが快適な家を作るために開発しているような気がします。

換気窓の開閉は？

質問：福島科長の話にあった、北側の換気窓で冬期の

冷気遮断や防寒といった面についてはどのようにお考えでしょうか？

福島：北側の換気窓というのは冬は使っていません。冬は吸気口を使っていますので、北側の換気窓というのは夏の防暑用で冷気の問題というのはあまりないと思います。ただ、北海道は外気温が低いので、そこを寝室などにしていますと、外気が入ってきて夏でも結構涼しいです。そういう意味では、開けておく窓というのは建物全体を考えて決めなくてはいけないのかなと感じます。石井さんのお宅はどうですか？

石井：私の所は寝室の窓を開けているわけではなくて、違う部屋から抜けるようになっていきます。要は、風が通る最後にできるだけ抜けていくようなポジションの窓を開けるという形になっています。そういった意味ではプランをどう立てるかということで、窓の位置や大きさが変わってきますので一概にこれがこうであるというのは言えないと思います。

次に、わざわざ富山から全国木製サッシ協議会の木原会長がみえてるのですが、何かコメントありますか？

木原：ちょっと福島先生にお聞きしたいのですが、ドレーキップの場合には内側に開くときに枠が大きくて開かないというように聞こえたのですが、どういう感じなのでしょう？

福島：枠の見込みが深いですね。ドレーキップが開くときには室内側の壁面から開くのではなくて外側から開いていきますよね。枠がありますでしょう。だからドレーキップと羽目殺しの窓だとちゃんと開いているのですが、ドレーキップ一枚だと内側に倒したときに内側に倒れた周りが隙間があまりない場合があるんです。夏の換気というのは、相当開けないと十分な換気がとれないんですが、周りの隙間が小さい状態になってしまうので、うまく換気ができないのではないかなという人がいたので、聞いてみたんです。

木原：私どもはドレーキップを作らせていただいたり、突き出し窓、外開き窓も作らせていただいているのですが、どちらの窓も使い方によって決まるのではないかなと思います。それから、外開き窓については、最近ではストッパーがついていたり安全装置が付いていたりし

ていますので、非常にいい窓ではないかなと思っております。

それから、我々は窓だけということは全く考えていなくて、さっきの福島先生のお話の中で本当にいい話だなと思ったのは、窓を作っていく上で住宅というものの断熱とか色々なものにおいて窓の役割を十分に考えて、夏はどこから風が吹くとか色々なことをお客さんから聞いて窓の選択をしていく必要があるということですね。そういう点で、今日の話から、窓を作ればいいということではなくて、住宅そのもののあり方というものをよく研究していかなければならないと思います。

窓が木であることの良さ

石井：木製サッシフォーラムですから、木の窓の良さと言うことでまとめなくてはいいのですが、今まで私たちは、木の窓は断熱性がいいとか、結露し難いとか、見た目やデザインがいいんですよとか、いろいろPRしてきました。ただ、先ほど増田先生のお話では、プリントの木肌と普通の木肌を比べてみて、質感が違うから、好みの問題で本物の方を選ぶだろう。ただそれは、そうであろうという先入観が刷り込まれているから、良いと思うのだけれども、プリントにも別の良さがあると考えられるようになってしまったら、それはどっちでも同じではないか。もし、そうであるのなら、樹脂サッシの表面にプリントしたものが受け入れられてくるのかな、と思ってしまいました。そうすると、我々としては寂しいものがありますし、本当にそれだけなのだろうか、と言いたいところがある訳なんです。樹脂サッシ自体を否定するつもりはないのですけれども、木製サッシには木製サッシの良さがあるんじゃないかなと思います。

先ほど、増田先生が、木の良さについてお話しされていましたが、それについては、ある程度大きな面積については十分言えると思うんです。ただ、木製サッシだけを見た場合には、木枠だけの話ですから、面積的には非常に小さくて、光の反射にしてもほとんど影響しない。どちらかというと、ガラスの面積の方がはるかに大きいですから、建物のデザインの中で、窓の存在を考えた方がいいだろうと思います。

では、その中でいったい我々は何を追求していったらいいのだろうかということなんですが、冒頭で言いましたが、内装と木製サッシが連携すれば十分対応でき

るのではないのでしょうか。特に木質系の内装材が使われることになれば、デザインのコーディネートといった面でみて、木製サッシを入れるということは結構おもしろいポイントになるんじゃないかという気がします。

増田：木製サッシというのはですね、ある意味でステータスとして流行るといいなという気がしているのです。アルミサッシというのは、やっぱり内装として冷たいですよ。その冷たさというのを、今のところ例えば関西なんかでは全然気にしていないで使っていますが、やっぱり木の方が暖かくていいんだということは、みなさん思っているのです。ただ、高いし、まだもったいないなあとという感じがあるんですよ。けれど、木製サッシがある程度行き渡るとそれがステータスになって、「やっぱりいいんだ」ということになるのではないのでしょうか。実際には、家のトータル金額としてはそんなに変わらないと思うんですけど。今のところ、なかなか手に入りにくいと言うのもありますし、大工さんとか工務店の方が慣れていないということでしょうか。

木質感に関しましては、印刷と本物というのは、今は印刷メーカーさんが一生懸命やってまして、我々の研究室に來たりしまして、偽物作りを我々は手伝わされてるわけです。確かに巧妙で、三次元光沢まで実は実現しているんです。まだ商品になって出てはいませんが、パテントは取っています。あれは、だましき

れば、本物だと思えば本物なんです。ある時、「えっ、これはおかしい」と思ってよく見ると印刷だったとわかってびっくりする。でも、本物の良さってのはありますから、長く使っているとわかるのですよね。そういう意味では、本物が使えればそれに越したことはないと思います。ただ、製造上の安定的な品質や色あわせの問題で、大手のメーカーさんはクレームが出るのをいやがりますから、印刷を使うほうが楽だという傾向に多分なるんじゃないかなと思うのですが。

石井：このあたりでまとめさせていただきます。

住宅というのは、窓だけ住宅だけということではできないのではないだろうか。全体で計画をしてそれに応じた窓の大きさであるとか、窓の開閉方式であるとか、間取りの仕方であるとか、住宅の構造であるとかというのを考えなくてはいけないのではないかと。それと、最近の技術革新はかなりなものですけど、やはり本物の木はみればわかる。よくよく見ればですけど、まだわかる段階であるということですので、そういった意味で言えば、本物の木は本物の木で立派なものですから、十分有効に活用する必要があるのではないのでしょうか。建材にしてもサッシにしてもそうなんですけど、長所は長所としてしっかり伸ばしてあげなくてはいけないのではないかと、というふうに思っております。

(文責：林産試験場 朝倉靖弘)